

# 日本語とタイ語の受身文の対照研究

サウエットアイヤラム テーウィット

名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生

tewichsawetaiyaram@yahoo.co.jp

## 1. はじめに

本研究ではタイ語の小説に見られる受身文の分析を通して、日本語の受身文と比較しながら、タイ語の受身文の機能、形態、構文、意味を記述する。

## 2. 先行研究

例1 chǎn **thùuk** khruu dǎa  
私 ラレル 先生 叱る  
(私は先生に叱られた)

例2 khamooi **thùuk** càp  
泥棒 ラレル 逮捕する  
(泥棒は逮捕された)

タイ語では、例1のように被害の気持ちを強く表現するために受身文が使用されると言われている (Phrayaupagitsinlapasan 1972、ミンミット 1980 等)。Iwasaki and Ingkaphirom(2005)は例2を取り上げ、受け手の視点から物事を述べたい時に、受身を使用することを述べている。但し、これまでの先行研究と同様、最も重要なのは話し手がその出来事を「受け手に良くない影響を及ぼす」と考え、タイ語の受身文の形式である **thùuk** を使用したと指摘している。そして、Iwasaki and Ingkaphirom(2005)は例3のようにタイ語では被害の意味が存在せず、中立的な意味を表している **thùuk** 構文があると述べている。

例3 phûubàatcèp **thùuk** namtuasòn roonphayaabaan  
怪我した人 ラレル 運ぶ 病院  
(怪我した人は病院に運ばれた)

これまでの研究では、被害の意味か中立の意味かに焦点を当てて研究されてきた。しかし、何故受身文が使われるのかについては言及する研究がほとんどない。本研究は、小説に現れた受身文を収集し、現在のタイ語では被害の意味を強調するために受身文が使用されるということだけでなく、結果の状態を表すために受身文も広く使われることを指摘する。

## 3. 日本語の受身文の形態、構文と意味－有情物の場合－

寺村 (1982) は「ラレル」は日本語の受身文と見なされる形態であると述べている<sup>1</sup>。日本語の受身文の構文について、直接受身、間接受身、持ち主受身に分けられる。また、「風に吹かれる」のように被害の意味を判断しにくい間接受身構文も考えられる。

表1 日本語の受身の構文と対応する能動文－有情物の場合－

形態	ラレル		
構文	直接受身	間接受身	持ち主受身
例	太郎は先生に殴られた 先生が太郎を殴った	太郎は事故で兄に死なれた (兄が死んだ)	太郎は犯人に顔を殴られた (犯人が太郎の顔を殴った)
意味	被害・中立	主に被害	被害・中立

#### 4. タイ語の受身文の形態、構文と意味－有情物の場合－

タイ語の受身文は形態が数多くあり、複雑である。タイ語学者の中で一般的に認められている受身文の形態はthùuk (doon<sup>2</sup>)、dâirúpである。

表2 タイ語の受身の構文と対応する能動文－有情物の場合－

形態	thùuk (doon <sup>2</sup> )、dâirúp		
構文	直接受身	間接受身	持ち主受身
例	chăn thùuk khruu dàa 私 ラレル 先生 叱る khruu dàa chăn 先生 叱る 私 chăn dâirúp luak càak thúkkhon 私 ラレル 選ぶ から みんな thúkkhon luak chăn みんな 選ぶ 私	どの形態からも作れない。タイ語では、自動詞から受身を作ることができないからである(ミンミット1980)。	chăn thùuk kháv tòp nâa 私 ラレル 彼 叩く 顔 kháv tòp nâa chăn 彼 叩く 顔 私
意味	thùukは被害・中立に使う <sup>3</sup> 。 dâirúp <sup>4</sup> は恩恵・中立に使う。		被害の意味に使う。

#### 5. 非情物の受身

非情物の受身の場合、日本語では同じ形式である「レル/ラレル」が使われる。タイ語では、例4のように直接目的語を文頭に移動する方法で、「thùuk」という前置詞が付かない無形態の受身文が使われると言われてきた。しかし、例5では、現在のタイ語にはthùukの使用が確認できる。受身文の主語は非情物の場合、中立的な意味でなければならないとされている。

- 例4 krapɔn khɔɔŋ phɔɔ thaɔ d̩uɔi s̩i kh̩iaw      例5 thanɔn thùuk phátthanaa khun  
かばん の 父 塗る で 緑色                      道 ラレル 改良 ようになる  
(父のかばんは緑色で塗られた)                      (道が改良された)

しかし、次の例6と例7は「thùuk」という前置詞が付かないと不自然なタイ語になる文も観察される。中立的な意味を表すとしたら、これまでの無形態の受身文を使用してもいいはずである。中立的な意味であるため thùuk を使用するという説明だけでは足りないことが分かった。

例6 lǎŋkhaa thùuk ruuɔɔk

屋根 ラレル 取り壊す

(屋根は取り壊された)

例7 plaa thùuk khǐaw hǎi lé

魚 ラレル 煮詰める

(魚は煮詰められた)

「thùuk」がかならず必要である非情物とそうではない非情物の違いはどこにあるだろうか。「thùuk」が必要ではない文は行為者があることを前提にしない、単なるその状態を述べることを意味する。それに対し、「thùuk」がかならず必要である非情物の文は状態を述べるだけでなく、行為者の存在を暗示する。行為者の存在がないと、その行動が成立しないため、行為者の存在が必要な文脈では「thùuk」を入れる必要があると考えられる。

## 6. 何故受身が使用されるのかー受身文の機能的特徴ー

表3 日本語の受身の機能

先行研究	受身の機能	例文
Kuno (1973)、高見 (1997)	受身にすると被害の意味が強く表れている。	例8 急いでいたのに、知らないおばあさんに道を聞かれた。
工藤 (1990)、野田 (1991)	受け手のテーマ化	例9 彼に呼ばれ、会いに行った。
工藤 (1990)、野田 (1991)	行為者の背景化	例10 財布が盗まれた。
工藤 (1990)	結果化	例11 友達が足を縛られている。

一方、タイ語は、被害の気持ちを強く表現するために受身文が使用されると言われている (Phrayaupagitsinlapasan 1972)。ミンミット (1980) は thùuk/ doon を動詞の前につけて表現する場合、常に被害の意を表し、被害を表さない受身の表現はタイ語には無いと述べている。Prasithrathisint (1985)、Iwasaki and Ingkaphirom (2005) は thùuk という表現形式が少しずつ中立的な意味を持つようになってきたと述べている (例3、例6、例7を参照)。

確かに受身文の形式である thùuk は中立的な意味で使われるようになってきた。しかし、中立的な意味であれば何でも thùuk が使えることではない。

例12 naaiA thùuk yǐŋ thǐi sǐsà

さん A ラレル うつ に 頭

(Aさんは頭を撃たれた)

例13 thùuk thanuthanɔɔm saməəmaa

ラレル 可愛がる いつも

(私はいつも可愛がられていた)

例12は、新聞記事からとったデータである。この後の記事から、実はAさんは犯人で、人を殺してから自殺したということが分かった。しかし、新聞記者が現場に行った時、誰が何をやっ

たのかわからない。目の前に見えるその結果（人が頭を撃たれた）及び状態を述べるために、分からない行動者を述べず、受け手の状況のみ述べていると考えられる。Iwasaki and Ingkaphirom(2005)が取り上げた例3も同じように説明できる。例13は、誰が可愛がるか重要ではなく、私の現在の状態のみを述べられる。このように、thùuk が使われるが、被害の意味を強調するために使われていない。誰がその行動をしたかを問題にせず、受け手がどんな状態にあるかにのみ焦点を当てている。最後に、工藤（1990）、野田（1991）が述べた「受け手のテーマ化（例9）」はタイ語には存在しない。例9のようなテーマ化はタイ語にすると次の例14になる。

例14 kháw ríak chǎn kɔ̀lɔ̀i pai phóp \*例15 chǎn thùuk kháw ríak kɔ̀lɔ̀i pai phóp  
 彼 呼ぶ 私 から 行く 会う 私 ラレル 彼 呼ぶ から 行く 会う  
 （彼が私を呼んだから会いに行った） （私は彼に呼ばれたから会いに行った）

## 7. 今後の課題

現在のタイ語では、動作主を言及しない時や結果を中心に述べたい時に受身文の使用も許されることが確認された。今後の課題として、日本とタイ両国の書きことば・話しことばの中で受身文の使用実態について調査を行う必要がある。

### 注

- 1) 但し、「素人ニハ虎ヲ育テラレマセン」のように「ラレル」の形態をしているが、主格に立つものが動作を受けることを表しているとは言えない場合、「受動形」と見なさない（寺村 1982）。
- 2) 話し言葉では「doon」の方が使用されることが多いと指摘されている（Prasithrathisint 1985）。
- 3) Prasithrathisint (1985) は集めた筆記のデータから、現代タイ語には「thùuk」は「悪い意味」と「中立的な意味」の言葉と結び付くことが可能であると指摘している。
- 4) dǎirúp は thùuk (doon) と違い、殆んど名詞と結び付く。例えば、chǎn dǎirúp khamchom càak khruu (khamchom は「ほめ言葉」を意味する。訳：私は先生から褒め言葉をもたらした) である。

### 主要な参考文献

- Iwasaki and Ingkaphirom(2005). *A reference grammar of Thai*. Cambridge Univeristy Press
- 工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学4』むぎ書房
- ミンミット・ニラタワット（1980）「受身と使役の表現の日・タイ・英語の対照研究」『日本語教育』40
- 野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- Prasithrathisint, A. (1985). *Change in the passive constructions in written thai during the Bangkok period*. Ph.D. dissertation. University of Hawaii.
- 用例出典 Suwannee sukhonthaa 『suansat』(例4-7、13)